

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成25年 7月25日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科 現代文化学専攻

職 名・学 年 修士課程1年

氏 名 吉 田 善 哉

助 成 の 種 類	平成25年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	生物学の歴史・哲学・社会学に関する国際学会 (International Society for the History, Philosophy, and Social Studies of Biology; ISHPSSB)		
発 表 題 目	Theoretical and Methodological Diversity in the 1980s: Early Development of Evo-devo		
開 催 場 所	フランス・モンペリエ		
渡 航 期 間	平成25年 7月 5日 ~ 平成25年 7月15日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(発表使用スライド)		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	学会参加費	12,540円
		交通費	166,480円(うち16,032円は自費)
宿泊費		21,012円	
パスポート取得代		16,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回援助を頂いたことには大変感謝している。短期的な利益につながりやすい学問ばかりが評価されがちな現在において、「社会的・経済的観点からの需要が必ずしも多くない重要な学問分野の継承と発展」を支援する本助成事業の意義は非常に大きいと思われる。今後も理系分野のみならず、人文系分野の研究者に対する援助をぜひとも行って欲しい。		

## 平成 25 年度 国際研究集会発表 成果の概要

京都大学文学研究科 現代文化学専攻  
科学哲学科学史専修 修士課程 1 年次 吉田善哉

このたび報告者は国際研究集会発表助成を受け、2013 年 7 月 6 日から 12 日にかけてフランス・モンペリエで行われた「生物学の歴史・哲学・社会学に関する国際学会 (ISHPSSB)」に参加してきた。その成果をここに報告する。

### 【発表の概要】

進化発生生物学 (evolutionary developmental biology, 略して evo-devo, エボデボと呼ばれる) は 20 世紀末に現れた、生物の進化と発生を共に扱う領域である。この領域に関しては多くの生物学者・歴史家・哲学者が歴史的・哲学的分析を行っているが、そこで示されている描像には著しい多様性が見られる。このように多様な描像がなぜ存在するのか、という問いに対して、エボデボの初期の発展を分析することで一つの示唆を得ようと試みたのが今回の報告者の発表であった。

報告者は 1980 年代に行われた学際的な (interdisciplinary) 研究をいくつか取り上げ、①異なる生物学分野の手法ないし成果の統合、②80 年代当時の支配的進化理論であった「現代総合説」に対する態度、という二つの観点からそれぞれの研究を分析した。その結果、各々の学際研究はどの分野の手法や成果をどのように統合するかという点でそれぞれ異なっていた、という意味で多様な局所的方法論的統合であり、また現代総合説に対してはそれぞれが全く異なる、互いに対立的でさえある態度を持っていたことが分かった。後者の理論的特徴は特に重要であると思われる。なぜなら、このような対立的な要素はその後調停されることもなく、むしろ対立点を曖昧にするような形でエボデボという領域の構成要素となっていくからである。

つまり、エボデボという複合領域は、そもそも方法論的に多様で理論的には対立的でさえあるいくつかの要素の寄せ集めの統合として生まれたと考えられる。エボデボという領域が持つこのような歴史的背景を踏まえれば、それに関する様々な解釈が存在するという事実も自然なものとして理解できるのである。

### 【学会参加の成果】

今回の学会参加で報告者が得た成果は大きく 3 つに分けられる。第一に、自身と同じ専門領域において高度な研究を行っている海外の研究者から評価を受け、助言を得ることができたこと。第二に、海外の高度な研究に触れることができたこと。第三に、様々な研究者と交流し、今後研究を進めていく上で役立つであろう人脈を形成できたことである。以下ではそれぞれの成果について簡潔に述べる。

#### (1) 自身の発表に関する評価と助言

今回報告者が行った発表は、進化発生生物学という領域の形成初期の歴史について分析し、それについて哲学的考察を行うというものであった。聴衆の中には Alan Love (進化発生生物学の哲学研究における代表者の一人であり、報告者がこのテーマで研究を行う出発点となった論文の著者でもある)、Manfred Laubichler (進化発生生物学の歴史研究における代表的人物)、Michel

**Morange** (フランスの生物学の歴史・哲学における代表者の一人), **Gerd Müller** (進化発生生物学に従事するドイツの生物学者)ら, 当該分野の第一人者もいた。

発表に対しては総じて肯定的評価を得ることができた。特に **Love** と **Müller** は報告者の研究に高い関心を示し, 進化発生生物学形成初期の多様性を正しく捉えたものであるとして評価すると共に, 多くの助言を与えてくれた。**Love** の助言は因果関係の分析に関する注意や研究をよりよいものにするための方向性の指針など主に技術的なものであり, 一方で **Müller** の助言は実際に 80 年代の進化発生生物学に携った視点からの具体的・実地的なものであった。また, **Love** からは今回の研究を学術雑誌に投稿することを勧められた。この助言を受け, 現在報告者は今夏中の投稿を目指して執筆計画を立てている。

進化発生生物学は現代生物学の歴史において大変興味深い対象であるが, それに携る哲学者・歴史学者は日本にはわずかしかない。そのため, 報告者はこれまで自分が行っている研究の学会における水準を測りかねており, また他の研究者からそれに対する助言を受けることもあまりできていなかった。今回, **Love** や **Müller** らの第一人者たちから好意的な評価を得, 多くの助言を受けられたことは, 報告者の今後の研究を大きく進展させてくれるであろう。

## (2)海外の高度な研究

また, 海外の高度な研究に触れることで生物学の歴史・哲学に関する知見を広げ, 自身の研究に関する新たな着想をも得ることができたという点でも, 今回の学会参加は非常に有意義なものであった。特に **Dietrich and Crowe** による 20 世紀中期の発生学の動向に関する研究は, まさに報告者が関心を抱いていたテーマに関する研究であり, 発生学史についての報告者の理解を深めてくれた。またそれだけでなく, ビックデータ解析の手法を用いた新しい形の歴史研究であったという点でもこの研究は非常に興味深いものだった。20 世紀中期以降, 生物学研究の進展は著しく加速したため, これ以降の時期に関する生物学史の研究は困難であるとしばしば言われる。報告者の関心の対象はまさにこの時期にあるため, 今後さらに詳しい歴史研究を行っていくためには, 既存の歴史研究の方法論に捉われない手法を柔軟に採用していくことが重要であろう。**Dietrich and Nathan** の発表はそのような新たな歴史研究の一つの可能性を示してくれたという点で特に重要なものであった。

## (3)他の研究者との交流

当学会はセッションの合間に 30 分ほどの休憩時間が設けられており, また夕刻のカクテルパーティーや夕食会も複数回開かれた。このような場を利用して, 海外の研究者との交流を行うことができた。幾人かの研究者は, メールによる助言や情報提供を約束してくれた。また, ある若手研究者からは海外学術雑誌への投稿依頼を受けた。このような人脈は, 報告者が今後日本国内に止まらない研究活動を行っていく上で重要になるものと思われる。

以上の 3 点が, 今回「生物学の歴史・哲学・社会学に関する国際学会」に参加したことで私が得た主な成果である。全体として, 修士課程 1 年次という比較的早い段階でこのような国際学会に参加できたことは私にとって間違いなく非常に有意義なことであった。参加を可能にしてくれた京都大学教育研究振興財団に対し深く感謝申し上げる。この経験を活かし, 国内外で活躍する研究者を目指して今後も研究を続けていきたい。